

(熊本郡上屋久町一湊字松山)

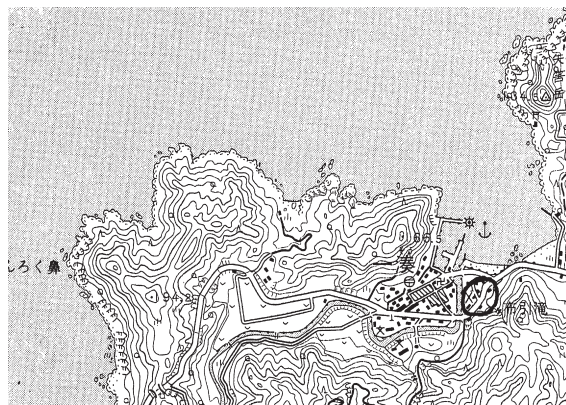
位置と環境

上屋久町一湊地区は、屋久島の北端部にあたり、東シナ海へ真北に突き出した矢筈岬の根元、一湊川によって開けた沖積低地と砂丘地からなる集落である。一湊川の右岸に形成された標高12m弱の砂丘地は明治初期まで松が茂っていたことから松山といわれる。その後気象測候所と無線局がおかれ、それらの官舎とその後一部宅地化して現在にいたっている。砂丘地全体に縄文時代前期の曽畑式土器から縄文時代後期末の一湊式土器までが、重層的に確認され「一湊松山遺跡」とされる。背後には布引きの滝があり、急峻な屋久島の山地帯へとつながって行く。

調査の経緯

発掘調査は戦後数次におよび、1952年・57～58年・80年・92年・93年・93～95年・96年に地点を別にして発掘調査が行われた。

1952年には、三友国五郎・河口貞徳・国分直一らが種子島・屋久島の考古学的調査の一貫として、試掘調査を行った。縄文時代後期の市来式土器の遺跡として把握した。なお森浩一も1951年に曽畑式土器を採集し遺跡の存在を明らかにした。1957年から58年に国分直一・盛園尚孝・重久十郎らが発掘調査を行った。1957年8月に縄文時代後期の包含層を、1958年3月に曽畑式土器包含層を発掘調査した。1957年には2つのトレンチを設定したが、IIトレンチは攪乱が有り、Iトレンチの発掘調査を中心に進められた。市来式・一湊式・磨研土器などの土器と、多数の自然礫や破碎礫とともに磨石・凹石・敲石・石皿が出土したとされる。1958年の発掘調査は新たにIIIトレンチを設定した。無遺物層を挟んで曽畑式土器の包含層が3枚検出された。曽畑式土器のほかに、花崗岩・砂岩・頁岩・礫岩等の自然礫や破碎礫が相当量出土した。礫面を残した特徴的な石斧や砥石が出土している。シカなどの獣骨片と魚骨片、シイやシャリンバイの炭化実等が出土した。これらは94年の発掘調査の曽畑式土器の出土層の8層が第三層に相当するようである。



第1図 一湊松山遺跡の位置

1980年には、急傾斜地崩壊対策事業に伴い、上屋久町教育委員会が鹿児島県教育委員会の協力を得て発掘調査をした。発掘調査地点は砂丘の西崖、一湊川側で約9mの比高差がある。約150㎡の面積で24層の砂層を5mほど掘り下げている。松山式土器(第4図)が型式設定された発掘調査であった。7層において松山式土器が個体毎に出土し、石皿や円礫が多量に存在しており生活面として把握したものの、明確な遺構は確認しなかった。2・3層は一湊式土器を主体とし、市来式土器が出土しており、7層は松山式土器を主体とする。これらによって市来式と松山式が分離され、松山式が古い型式とされた。入佐式土器・黒川式土器・奄美諸島の喜念I式土器も出土した。また轟式土器が出土したとしたが、最近の研究では中期の条痕文土器の可能性が指摘されている。

1993年には個人住宅建設に伴い鉄筋コンクリートの基礎部分について2回調査がなされた。主に縄文時代後期から晩期の包含層の調査であった。3月の調査では縄文時代後期の周囲に石を配した土壇が2基検出され、土壇際に一湊I式土器が出土した(第5図)。墓壇と考えられる。

1993年～95年には砂丘の南側を横断する県道・主要地方道上屋久永田屋久線の改良工事に伴い、鹿児島県教育委員会が発掘調査をおこなった。1993年10月に確認調査を実施し、この結果を受けて1994年5月～7月・95年10月～11月に道路部分の本調査を実施した。調査面積は約390㎡である。表土は攪乱され縄文時代後期の遺物を中心に弥生時代の遺物もあ

ったが、2層の縄文時代後期から17層の縄文時代前期まで、無遺物層を挟んで18層堆積していた。

土器については17層から8層は曾畑式土器を中心に出土し（1～8・12～14）、5層で深浦式土器と条痕文土器と曾畑系土器が出土している。3層からは深浦式土器（15）を中心に、条痕文土器とわずかに曾畑系土器が出土した。石器は石斧（9～11）・磨石・敲石・礫器などが多量に出土した。石材は島内の粘板岩・頁岩や砂石を用いている。黒曜石については、小剥片が8層で2点出土しているが、それ以外に出土がなく、海洋性の文化のわりに石器素材の持ち込みは少ない。砂層のため食物残滓と考えられるイノシシやシカの獣骨も出土した。5層までを前期とし、3層を中期、2層を後期とした。

¹⁴C年代測定では、5層まで約5,000年前を越える年代である。

遺構は縄文時代の前期の曾畑式土器に伴って8層からの底石をしっかりと持つもの1基（第3図）を含む集石遺構が3基と石斧の集積遺構が検出された。同じく前期とした5層からは1基の集石遺構と1基の配石遺構が検出されている。3層の縄文時代中期では2基の集石遺構が検出された。また一湊式土器の時期の中央に石囲い炉がある竪穴住居跡（第3図左下）を検出した。

特殊な遺物として、縄文時代前期の穿孔のある土板（16）、同じく葉痕を残す焼結粘土塊（17）、一湊式土器に伴う縄文時代後期末頃の有孔紡錘形土製品（18）も出土した。

96年には砂丘の北東側から布引きの滝までの範囲確認調査は、町教育委員会が調査主体となり、鹿児島県教育委員会の協力を得て実施された。縄文中期の集石1基、曾畑式土器・深浦式土器が出土した。

遺跡の特徴と意義

一湊式土器・松山式土器という南九州の縄文時代後期の土器型式の設定遺跡である。また縄文時代前期から後期末にかけての砂丘遺跡であり、遺構・遺物ともに良好に保存されている。獣骨などの有機遺物が残存している可能性も高い。特に北は鳥取県から南は沖縄本島まで分布する曾畑式土器が出土しており、その型式変遷が西北九州から波及的に伝播し

ながら、地元で土器製作をした様相が伺われる。南西諸島と九州西海岸をつなぐ位置にあり、曾畑式土器の出土量の多さと累層的に出土する時間的な推移から、曾畑式土器文化の地域センターであったと考えられる。土器の伝播や土器文化の変容など考える際の重要な遺跡である。

資料の所在

出土遺物は、県立埋蔵文化財センターに保管されている。なお、一部の土器・石器については上屋久町郷土資料館に貸し出され、展示中である。

参考文献

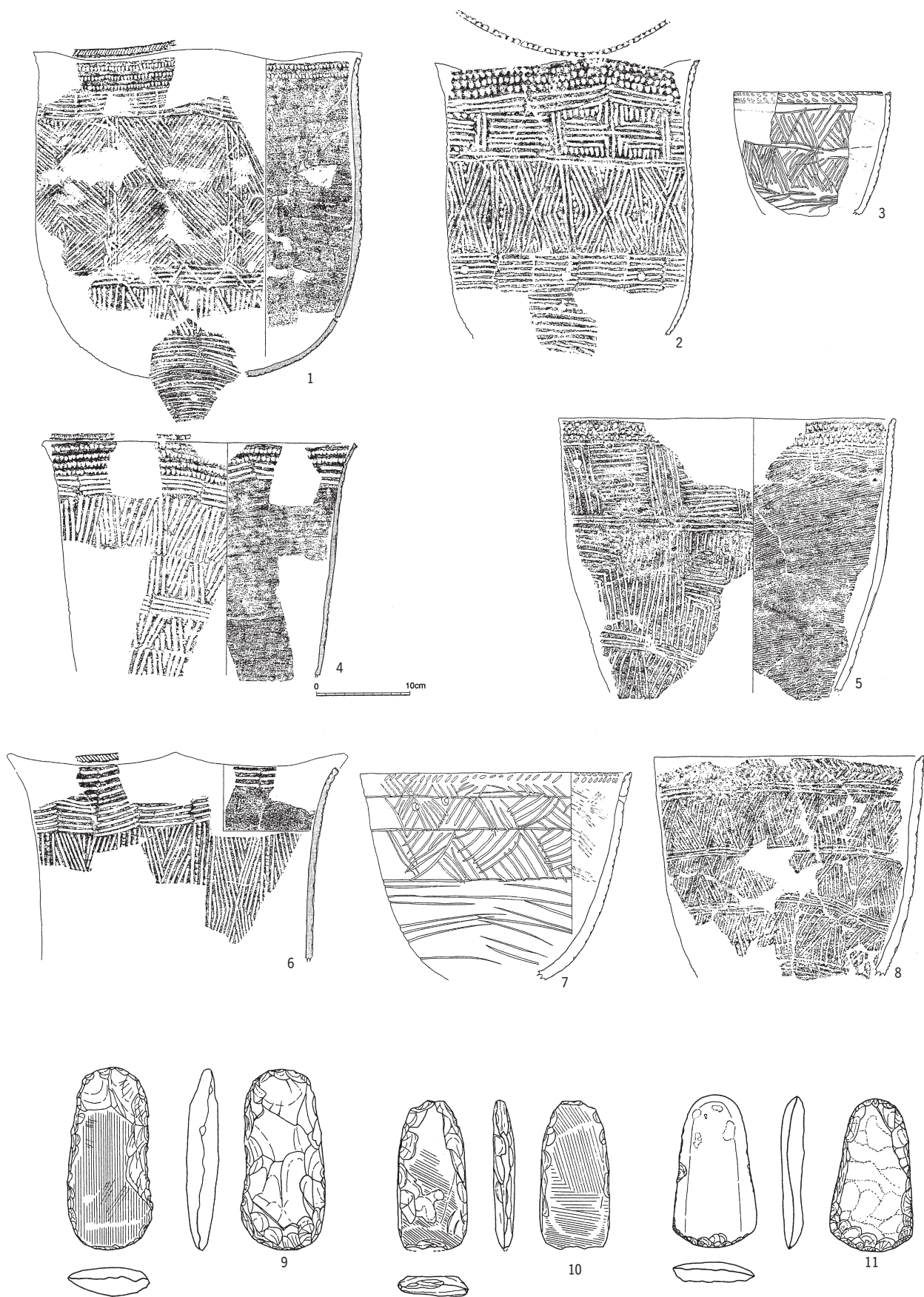
三友国五郎・河口貞徳・国分直一1953「薩南諸島の考古学的調査」『考古学雑誌』第39巻1号

国分直一・盛園尚孝・重久十郎1967「鹿児島県屋久島一湊遺跡の発掘調査概報」『考古学雑誌』第53巻第2号

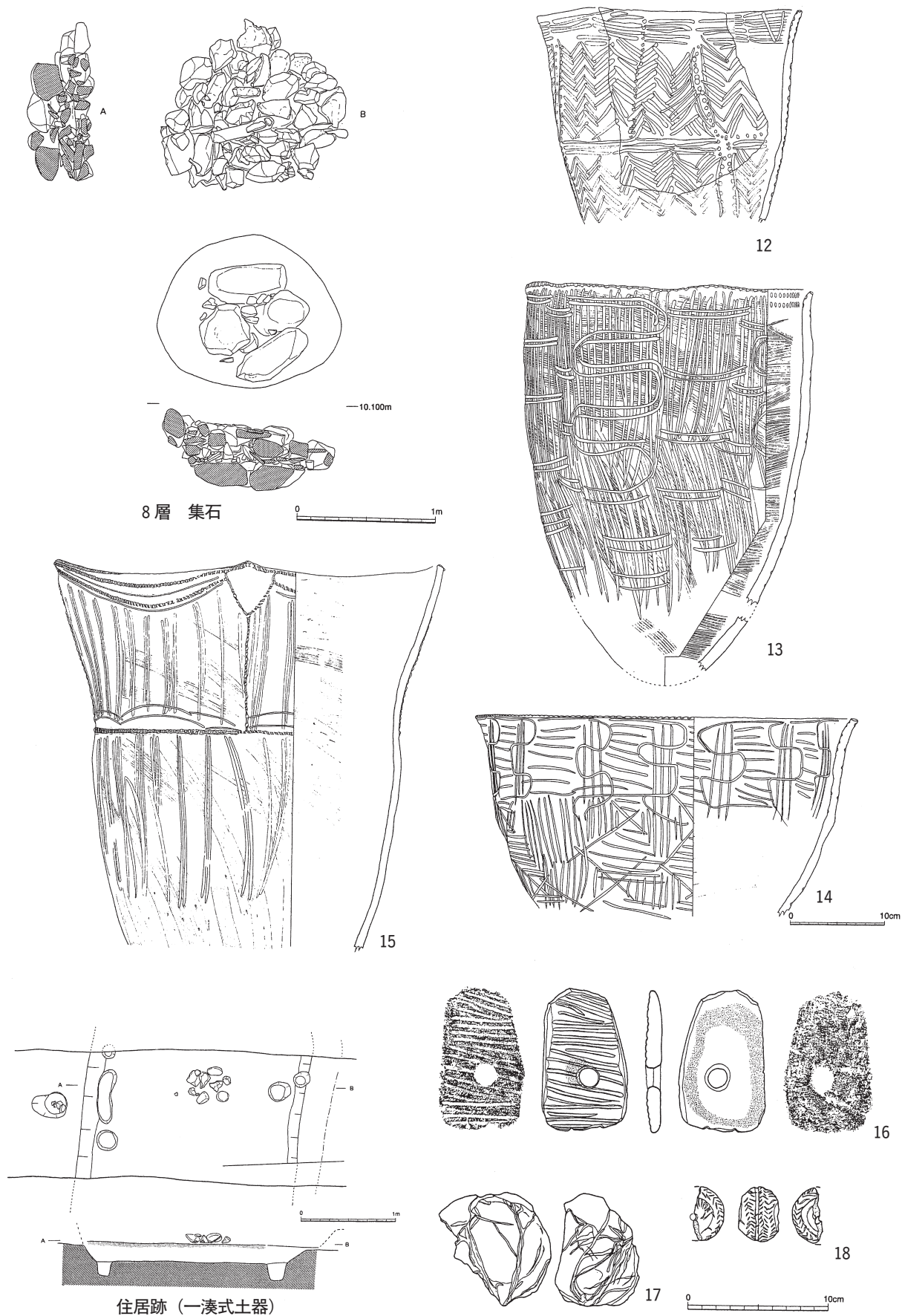
上屋久町教育委員会1981「一湊松山遺跡」『上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書』

鹿児島県立埋蔵文化財センター1996「一湊松山遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』19

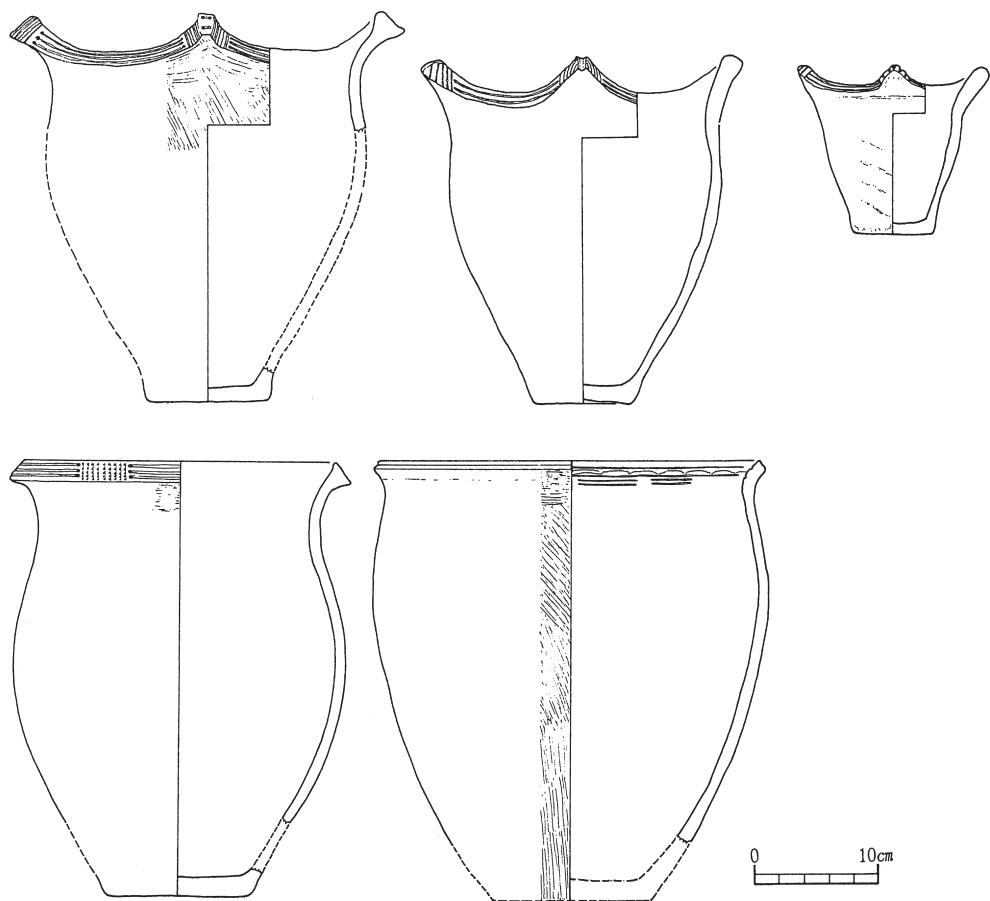
（堂込秀人）



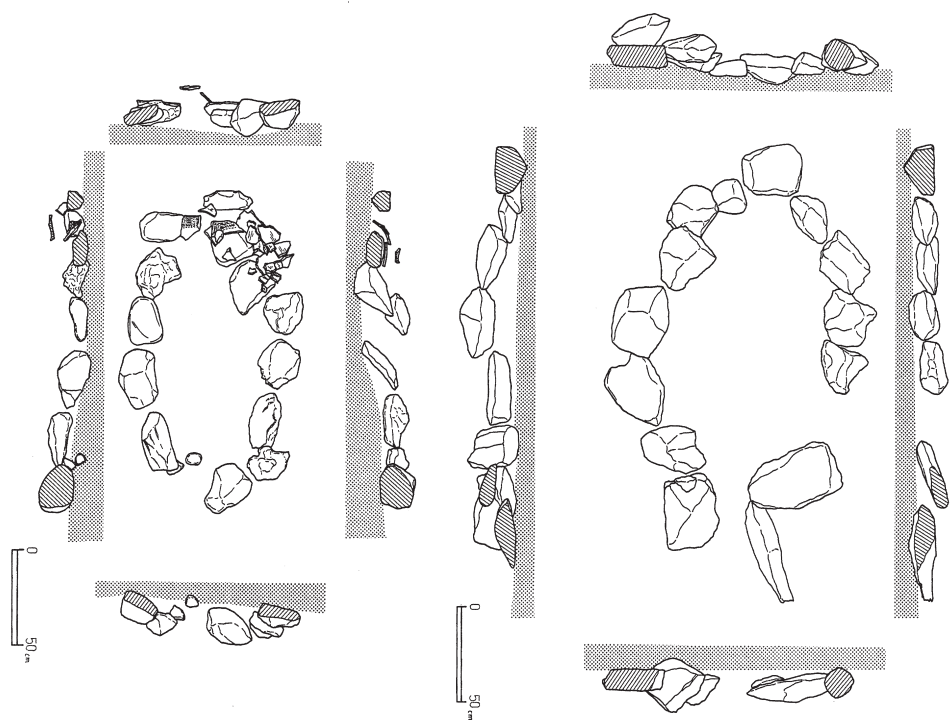
第2図 曾畑式土器と石斧 (94' 17層出土)



第3図 遺構と遺物 (8層出土12~14, 3層出土15)



第4図 松山式土器



第5図 配石土壇